

日本ボーイスカウト北海道連盟だより 149号



斧の響き



北海道連盟ジュニアリーダーのつどい



〔キーノートスピーチ〕

若い諸君のなすべきこと

東海大学名誉教授 逢坂 伸一

《道は変わる》

平成元年を挟んだ4年間、北海道東海大学で教員養成課程を作るため札幌にいました。専門分野は教育学、社会教育です。

北海道連盟では「若い風」と称していますが、日本連盟のプログラム委員長やユース特別委員会を担当していた時に、ユースというのはおおよそ18歳から25歳の範囲と決めて発表したことがあります。

この“ユース”・“若い”ということは年齢だけの問題ではなく内容の問題です。

このつどいのようにリーダーと若い人たちが一緒に参加し活動するということは素晴らしいことだと思います。リーダーの皆さんは若い方の考えを理解し、若い皆さんはリーダーの方のヒントを得ながらどんどん発言をし、実践行動を進めれば素晴らしいと思うし、北海道の場合は今が最適なのです。

関東の人達は、日常生活上吸収しなければいけないものが沢山あり、あくせくした毎日を送っていますが、北海道や東北の人というのは、豊かな自然の中で、ちょっとのんびりした気質があり、いわゆるゆったりと生活しているのではないのでしょうか。

大学で教育のことを勉強したと言いましたが、高校時代は弁護士などになるか悩んだこともありましたが、マスコミ研究から社会教育の道を選びました。このマスコミ研究を専攻している時には放送記者や新聞記者になりたいと思っていましたが、ゼミ担当の先生の指導で放送を通じて学習する婦人学級の研究に没頭し、メディア研究を通じて“大人が勉強をする”ということは何なのだろうかと考えるようになり、今の自分があるような気がしております。

皆さんも多分、今、色々やりたいということがありますが、これからの様々な体験によっても自分の歩もうとする道筋も変わってくると思います。

皆さんは18年間の実体験経験しかないわけで、その先を決めろと言われても経験をしてないから本当は非常に難しく、今思っていることが修正される可能性がある。ただその時、目標や計画をきちんと持っているかどうかということは非常に重要だと思います。

僕の場合、その後の研究に影響を与えられたのは、学生時代、そして卒業後にも滞在したスウェーデンでの体験であり、向こうの様子を見てびっくりした事柄でした。

スウェーデンというのは、「幸せ社会の国」とも紹介され、大学へ入学する場合も、入学試験があるのは法律・医学・建築などの限られた分野だけで、あとはそれほど苦勞しなくても入学できます。また、高校中退者率が日本などより多いことも特色といつてよいかもしれません。

これは、高校の学習についていけないというよりも、夏休みなどに日本で言えばアルバイトみたいな体験を通じて、それが自分の歩む方向だと思っただけで、ためらわずに専門学校に行ってしまうなどの場合が多いのです。

特に医療関係、医師、看護師など、お医者さんの場合には、例えば看護師としての経験年数によって医学部での就学年数が短縮されたりしますので看護師が医師のコースに進むことも目立っており、女医さんが圧倒的に多い背景なのかもしれません。

すなわち処置したり、治療したりということも大切だけれども、ナースという語の意味するところでもある、看取る、患者さんと一体となって治療に当たるという、福祉的な学びも含まれた北欧独自の人間性といってもよいでしょう。

そこで影響を与えられたもう一つの体験があります。私がスウェーデンに滞在していたころのわが国では、高学歴の商社マンがもてはやされ、彼らが意気揚々と海外を飛び回り、ようやく出回り始めたコンピュータ関係の売場に活躍しておりましたが、彼らと商談をするスウェーデンの若者の大部分は、高校中退または中卒者であることに驚いたものでした。

スウェーデンなどでは、小中学校での基本的な教育は大事であるとしても、人間としての学びや経験も成長のために大事であるということに早くから気づいていたということでしょう。学校で今勉強することは確かに大切ですが、同時に、それ以外に何か自分が身に付けることは無いかどうかを考えることも必要ではないかということでしょう。

《自然環境の問題》

最近気になっている課題が二つあります。

一つは、丹沢大山崩壊などの環境問題です。

僕の研究室から見える、神奈川県西部にある丹沢大山国定公園の標高1,500mの丹沢大山は、いまから40年位前は全体が緑豊かな山でしたが、最近では緑が枯れて土気色の部分が目立ち始めているのです。

毎年、幼稚園児や小学生とこの山に登り、皆さんもビーバーやカブのスカウトたちと経験していることですが、「ちょっと静かにして耳を澄ましてみよう」といって、山の中で耳を澄ませて小鳥の鳴き声や木々ずれの音など“自然の姿を聴く”ことをするのですが、数十年前には、「何にも聞こえない」と子供たちが言う数秒間もありましたが、今は常時、ザラザラ、サラサラと、砂が流れるような、すなわち、土が崩れるような音や、遠くから東名高速の自動車の音も聞こえてくるような状況になっています。

この砂が崩れているのかなと思う音が聞こえて始めて30年以上経っているのですが、誰も何の対策も講じられていません。

でも、この丹沢大山で自慢できることは、登山口の麓にストッキングに半ズボン履いて、三指の敬礼をしている「少年の像」があることです。これは日本の少年団が初めてこの地でキャンプをしたことを記念して建てられた銅像であり、地元のボーイスカウトの誇りでもあるのです。ボーイスカウトらしい活動の始まりかもしれません。

環境問題についてですが、平成元年前後、僕が北海道に住んでいたころ、NHKで放送された「北方四島の自然」というドキュメンタリー番組の中で、アナウンサーが「少し前まで北海道にいた小鳥や自然の植物が、この四島にはまだまだたくさん見られます」というようなコメントを言っていたので「あれ？」と思いました。

本州にいる人間としては、北海道は自然だらけでなんの問題もないくらいに思っていたのですが、このコメントを聞いて北海道もそうなっているのか、関東以南ばかりでなく、日本中が大変だということに気づかされたことを覚えています。

皆さんは地球が蝕まれているということについて、どんな考えを持っているのでしょうか。チャンスがあったら、話し合ってみてください。

《教育環境の問題》

＝後輩のために勉強する＝

もう一つの最近気になることです。皆さんは学校生活に満足していますか。

日本の学校教育制度は、明治時代にスタートして、第二次世界大戦を契機に大きく変わり、その後も社会の変化に応じて少しずつ変わってきています。

人間は年齢と共にだんだん成長していきますが、どの時点で頂点を迎えるのかという研究があります。個人差があり、30歳の人でも40歳の人もありますが平均すると20歳前後です。

僕が研究している「大人が勉強する」ということの理論では、死ぬまで学ぶことによって成長の度合いの下降速度を抑えることが出来るということです。皆さん方も、もうそろそろ頂点に達し始める年代ですが、努力を継続することによって、もっともっと成長力が上がると確信しておりますので、頑張ってください。

では、下がらないようにどうするかという一つのヒントは、自分のために勉強するのと同じく、後輩のために勉強するという意識を持つ事によって、学びの意欲を継続することができると思います。

我々は次代を担う子供たちのために努力しているのだということを気付いて欲しいと思います。

後輩のためにフォーラムをやって何かを残す、自分より年齢の若い人が、それに関わった場合にどうするのか、どうすれば彼らは喜ぶのだろうかと考えてみると、“行うこと、学ぶこと”の意義が生まれてきます。

ベンチャーは何かやろうとする場合には、楽しいことを探し出しますが、ただ自分が楽しいからやるというだけではなく、その楽しいことを次の子供たちに分け与えるのだという意識があってもいいのではないのでしょうか。

そうすると、後輩達に笑われないようにするにはどうすればいいのだろうか、理解してもらうにはどうしたらよいのだろうかと考え、様々な工夫や努力をするようになります。

大人になり切ってしまうと、なかなかそうはいかない。例えば、ウッドバッジ研修所でベンチャーの勉強をしている人達に、“ベンチャーが何をしたいか考えてごらん”、と質問しても新鮮な答えなどはなかなか出てきません。既に、ベンチャー年代は過去のことであり、通り過ぎてしまっているからです。

＝学校だけが学ぶところではない＝

3・11以降、テレビに流れているACジャパンのキャンペーンCMに“心は誰にも見えないけれど、心遣いは見える”“思いは見えないけれど、思いやりは誰にでも見える”のコピーで、電車の中で妊婦に座席を譲るシーンや中学生と思われる男の子が、階段を昇る重い荷物を持ったお年寄りの横を通りかかり、荷物を持ってあげ、いたわる姿が放送されているのをご覧になった方も多いと思います。

僕はこのコマーシャルを見ていて気になるのは、荷物をおいて階段の途中で立ち止まっているおばあさんの様子を見ている少年がちょっとためらいのような間をおいて、結局は荷物を持ってあげるというシーンがあります。このシーンに、現代の学校教育とボーイスカウト活動のそれぞれの大切さが表れていたように思うのです。

少年は、おばあさんが重い荷物を持って階段を上っているのを見た時に、一瞬「あっそうだ、困っている人を助けるということが正しいと教科書にそう書いてあった、先生もそういった」ということを思い出して行動に移すのではないかと僕は思いました。そして、それだけでは、本当に心からの協力をしたということとは少し違うなあ、それでは足りない。何も考えないで持ってあげる人にならなければならないのです。

ボーイスカウトはそれが出来るし、諸君は、そういうプログラムを後輩スカウトたちのために作らないといけないのです。

学校の先生は、教科書を教えているから、自分達は正しい人間らしい行動をしているのだと無意識のうちにみんな思っている。学校は正しいことをやっているのだから地域の人達はどうぞ手伝ってくださいと思い込んでいる。そうじゃなくて、学校と地域の両方が一緒にもっと胸襟を開いてという形でやれば、世の中は本当はもっとうまくいくのです。

電車の中で席を譲る、というのを皆さんどういうふう意識して譲るかですね。

たぶん、一瞬、とにかく席を譲ってあげようと思います。それはいいのですが、席を譲ってやるということは格好いいことだ、恥ずかしいけどやってや



ろう、などと思いき行うのは未だ意識が足りないと思う。自然に無意識に何も考えないで、席をすっと譲ることが出来るようになるということは、もう身についているのです。

例えばそこでおばあさんが「いいです、私は次降りますから」と言われた時に立ち上がった人はどうしますか、恥ずかしいそぶりをして隣の車両に移っていくのを僕は見たことがあるけど、何も考えないで「そうですか」と、「では、僕は座ってますよ」でいいはずなのにそうはいかない。ということは、そういう行為がまだ身についていない、まだ自分のものになっていないのです。

自分のものになれるような努力が出来る。それがボーイスカウトで体験することによって、可能なのです。

ボーイスカウトは、そういうプログラムを後輩のために作ってほしいと思うわけです。別に大げさなことではなくて、教科書で学んだことがすっと出来るかどうか、学校では教科書に書いてあることを学習しているだけだから実践活動が足りない。

＝経験を活かして体験活動のプログラムを＝

今から10年ほど前に、文部科学省が小学校5年生は1週間以上の野外体験活動をしてほしいという要望を、各学校、教育委員会に出しました。京都市はすごく熱心で山の家や海の家を作りそこに交代で学校毎に1週間ずつ泊まり込みをさせて野外体験活動をさせています。

そこで、文部科学省が民間の関係者に委託して野外体験活動を学校教育の中である場合のプログラムを提供してもらった例があるのですが、野外活動センターとか少年自然の家で野外体験活動をするとその間の授業時間数が不足してしまうというわけで、せっかく野外の施設で活動しているのに算数の授業を午前中にやろうとか、ハイキングと書いてあるけど、理科の先生が教科書に合わせて自然観察のプログラムを組むという形でしか野外体験活動が成り立たなくなり、子供たちにとっては、せっかくの自然の中で、のびのびとした活動をしようと思っても、学校と同じ時間を過ごすだけのことになり、興味も半減してしまうのです。

もっと自然を取り入れた具体的なプログラム、カリキュラムが出来ないと、本当の自然体験活動を子供たちが身に付けたり楽しんだりすることは出来ないだろうと思います。

皆さんは、例えばビーバー年代の小学校の1、2年生を3泊4日以上泊まり込みするとしたら、どんなプログラムが描けるかということもいつも考えて欲しいと思います。私たちの年代では、固定化された学校教育を経験しそれに基づいた生活体験が身についているから、今の子供たちが納得するようなプログラムが出来ないのでダメなのです。皆さんの年代だったら出来るのです、色々なところで体験的なプログラム開発を展開してください。

＝広がりのある学びを～繋がるプログラム・プロセスを大事にする学習＝

ゆとり教育という言葉があったのを知っていますか。

日本の教育制度では、中央教育審議会が審議して文部科学大臣に答申し、その内容を具体化して、公開するのに10年ほどかかるので、学校などの現場で実現するころには、10年ほど前の課題解決でしかなくなっているといえます。

「ゆとり教育」が必要だと唱えられ10年経ってから動き出した時にはもう世の中変わっていますから、多くの人達から「いや、もう違うのではないか」という話になり、また慌てて教育制度を変え始めているのです。

ゆとり教育の時代に学んだのは今年大学を卒業した人達あたりまでで、そのゆとり教育も修正されて来年の4月から土曜日授業を行うことが決まりました。

文部科学省が土曜日授業を行うために、全国的にアンケートを取ったら、ほとんどの県の教育委員会が「土曜日授業を急に行うのは止めて欲しい」「いろんな差し障りがあるので調整したい」などの意見が寄せられました。

そこで、一つ目は「土曜日に授業をやっているですよ」、2つ目は「授業じゃなくて、何か課外活動みたいなこと、あるいは塾の人を呼んで来て何か別のことをやってもいいですよ」、3つ目は、「民間団体にお任せしてもいいですよ」と、例えば、学校で塾を開くこともできるし、ボーイスカウトで土曜日に学校でいろいろな活動をするということもOKなのです。

ちょうど僕が北海道にいた頃に、学校週5日制がスタートしました。

この時に変更になった事柄は、例えば、「生活科」の新設、中学校は平成14年から奉仕活動、野外生活体験活動、環境教育、国際理解などが重点項目となり、そして「総合的な学習の時間」も新設されました。

しかし、多くの課題があり野外生活体験では、学校の先生は専門的に出来ないので外部の人をお願いしようとして、文部科学省は「自然体験活動指導者養成講習会」を全国各地で開催したのですが、学校は先生がまず中心になってやらざるを得ないから“じゃボーイスカウトに任せましょう”と言えないので、何も変わらない、何もできないという状況が出来てきました。

それからもっと重要なのは「総合的な学習の時間」です。

国語、理科、社会、算数などは科目別にそれぞれの到達点を勉強するだけであって、相互にコミットしていかないで、各科目を総合して人間的に成長していくということにならない。それを修正したのが「総合的な学習の時間」なのです。

この「総合的な学習の時間」は、何をテーマにしますかというのがスタートなのです。テーマに添い生徒がどれだけ時間を使うのか、プロセスをどうやって対応していくか、勉強していくか、なのです。

例えば、太陽について研究したいと思った中学生が、太陽について勉強している間に飽きてきてしまって月に移ろうとしてもOKなのです。総合的な学習の時間は自分にとってプラスのプロセスになるのであれば、それは認められるべきもので、いやいやながらもずっと太陽のことばかりやっていたって、それはあまり身につかない。総合的な学習は結果よりもプロセスが大事なのです。

これは、ボーイスカウトのプログラムといってよいでしょう。

例えば紙飛行機を作って遊ぼう、これは総合的な学習の一つの初歩的な所です。作るだけではなくて、それをどう活用する、その後、次の興味にどう持っていくかというのが、指導者の努力です。ただ紙飛行機作って飛ばして、今週はこれで終わりでは“単なる学習”であって、“真の学び”はないのです。

そこでスカウトは、本物の飛行機に興味を持つようになるかもしれないのです。その子が何か興味を示せばそれをチラッと見せて、「そういえば隊長ね、この前、羽田に行ったんだよ」「旭川空港とこう違うんだぞ」などと話しかけることにより、それについてくる子供もいるかもしれない。

そうやって繋げていくのがボーイスカウトのプログラムです。皆さん方の活動の中で、ビーバー・カブ・ボーイをジュニアリーダーとして支援する中でこのように「繋がるプログラム」を考えて欲しいのです。

ある小学校では、1年生の月曜日の午前中ハイキング、午後は作文。火曜日は水について、というカリキュラムになっています。

文部科学省の示すカリキュラムにもとづく学習をやっていないのではなく、ハイキングで裏山に行き先生が「落ち葉拾った子いる？何枚？数えてみよう」とか言って算数の時間になる、そういう工夫をして、算数の時間だから数字の問題だけ、国語の時間だから作文作るだけではなく、総合的にやるのが総合的な学習の仕方・総合的な学習で、ボーイスカウトのプログラム展開で既に実践されていることなのです。

《フォーラム》

フォーラムという言葉は、元々はラテン語からきており古代ローマでの広場・原っぱという意味です。

古代ローマでは市民が自由に政治の問題、裁判の問題などを「自分はこう思う」とその広場でお互いに発表し合っており、それら全体を含めてフォーラムというようになりました。

中世になると、ロンドンのハイドパークでは、自分の意見を発表するコーナーがあり、ここもこのフォーラムから来ているということで、イギリスでは結構発展しています。

例えば、コーヒーショップやパブもその流れを汲んでおり、あそこのコーヒーハウスに行くと、コーヒーは薬になるのかならないのかがテーマで話し合われている、こっちでは政治の問題を語っている喫茶店だとかが広がっていった。

その大人版がパブで、アルコールを口にしながら恋愛問題について語るパブがあったり、政治問題を語るパブがあったり、文学の問題を語るパブがあったりする。

そこでイギリスの人達は自由に意見交換をしているから意見交換の仕方が割と訓練されて、議会でもギリギリのところまで野党と与党が面と向かってやり取りを



している。しかも議論が白熱して混乱しないように、争いにならないようにカツラを被ったりしている、あれも一つの方法なのです。日本の国会はどうでしょうか、すぐ乱闘騒ぎになったりしています。

日本人は、討論下手といわれております。それは、阿吽の呼吸などのように余り言い合いをせずに物事を切り抜けようとする国民性なども影響していると言われます。海外留学中に、外国の人々と意見交換をしている時に黙り込んだりしていると、「あなたは本当にこの問題について理解しているのか、私にはわからないのだが」、などと切り返されることが少なくありませんでした。最近では、海外でも堂々と自分を主張する日本人が増えてきておりますが、まだまだ不十分だと思います。

皆さんのフォーラムはどうでしょうか。他の県連のフォーラムに参加してみると、割と格好良く整然とやっていますが、どうも本質的なことに触れずうわべだけの提言を出してその後何も生きてこないという状況があります。

どうせ先輩や大人のリーダー達がこれは扱ってくれないよという意識でまとめるから、気持ちがかもっていかないのかも知れない、それがいけないのです。

フォーラムで提言して、皆がやりたいと決めたら、それをリーダーや隊、団、地区もバックアップしなければならぬし、バックアップが出来る、出来ないかをはっきりさせてあげないといけない。

皆がやりたいと言っているが、こうこうこういう理由だと無理だ、このような別の方法でやれるとできるのではないか、などその後のフォローを出来るかどうかは課題です。

逆に言うと、みんなが出来るもの、大人を説得できる内容のものをきちんと押さえておくことが大切です。

＝スカウトフォーラム＝

スカウトフォーラムとは何なのだろう。

スカウトフォーラムとは、スカウト運動の原点に戻ってスカウトたちの声に耳を傾け、その意見をスカウト運動に反映させていくことを目的にしています。

日本では、1974年、北海道千歳市で開催された「第6回日本ジャンボリースカウト会議」を皮切りに、全国的なスカウトフォーラムのプログラムが定着しています。

このスカウトフォーラムは、スカウトが自己の成長を図り、また幅広い社会性を身につけ、相互の理解を深めるための貴重な機会ですが、スカウトフォーラムだからスカウトのことだけを話し合うだけでいいのだろうか、ベンチャーだからスカウトの枠から飛び出して、我々は人間としてこのことを話し合おうということぐらいにまで発展させてもよいのではないのでしょうか。

人間のフォーラムなのです、ユニフォームを着ている時も、ユニフォームを着ていない時も、そのテーマについて同じように真剣に話し合いが出来るかどうかということが重要な一つのポイントです。

スカウト代表の人たちだけで話し合いをするだけではなく、もっと自由にいろんな人、スカウトではない仲間も参加した話し合いが出来るようになればいいと思います。

そのような場でも話し合いが出来るようなテーマこそが大切なのだと思います。

このことにより、ベンチャースカウトが、自分自身の主張を持ち、自立心を高めていくためには、新聞や本を読み、他人の意見に耳を傾け、多くの情報をキャッチすること、そして実際に自分の目でその物事を見て、個々の意見を持つことが必要になってきます。

また、自分自身の意見を述べ、自分の内面にあるものを外へ表現することによって、創造力や個性を伸ばすことが出来るのです。また、自己の考えを人に聞いてもらうことは、利己的な考え方や極端な考え方もう一度考え直すきっかけになるのです。

スカウトだけの問題では論議が広がらない、それをもっと広げるためには、自分の友達、ボーイスカウトではない友人はこのことについてどう考えるだろうか、ということを考えてみたりしながら整理していくと、もう少し面白くてゆとりのあるものになるのです。

＝いろいろな討論の進め方＝

討論の進め方にはいろんな方法がありますので、これから勉強するといいいと思います。

『バズセッション』というのは、少数で話し合いをして、その後全体で発表して、また討論するというので、日本では「ブンブン討議」とも言います。

大ホールのあっちでもこっちでもグループが出来て、ワイワイガヤガヤやるから蜂の巣をつついたようだということでブンブン討議。

いま小学校で熱心に行っているのは『ディベート』です。これが討論の一番基本で、ボーイの時に隊でディベートをやるべきだと思います。

ディベートで、冷静にYESかNOかをお互いに決めて、YESのためにはこういう意見がある、NOではこういう考え方がそこに突き合わされるのではないかと、話し合いをして冷静に判断できる能力を養います。

この訓練をしておけば、ベンチャーのフォーラムでもそれが生きてくる可能性があります。

自分としてはこう思っている、だけど、みんながその逆だとすれば、「自分としてもそれはこうこうこういう意味では賛同できる」など冷静に判断出来るのです。

NASAでの話し合い技法訓練の例で究極の方式と言われており、宇宙に行けばチームが1人でも崩れたら宇宙で生きていけないことがあるので、なかなか結論が決まらない事でも最終的に全部の意見が一致するまで何日も何日も同じテーマで討論をするのです。

『ラウンドテーブル』ボーイスカウトでよく使っていますが、以前は冷静にお互いの見識を高めるラウンドテーブルが行われていましたが、各地区のラウンドテーブルは一般的にコミッショナーの報告や行事の打合せで終わってしまう場合が見受けられ、本来の意味を失いつつある例もあります。

「ラウンドテーブル」というのは、十字軍騎士の頃、いろんな国の代表が集まって来て話し合いをしようとする時に、誰がトップになるかということは不明確なので丸いテーブルについて上下関係なく話し合いをしているんなことを決めたというのが「ラウンドテーブル」の元々なので、これを活用することができますね。

誰が責任者だからその人を中心に物事を決めるというのではなく、責任者であっても、そこでは平等な立場で話し合いに参加するということであり、それは訓練によって上達すると思われれます。訓練しないといひ加減なものになってしまいます、「ラウンドテーブル方式」というのをスカウトの時に勉強して、経験・訓練をしておくことが必要です。これは大人になってからとても役に立つことなのです。

具体的には、「進行係」「時間をチェックする人」「記録をする人」「発表する人」を決めて“話し合い”を行います。そのベースになるのが「ラウンドテーブル」で、そしてボーイ時代に「ディベート」の体験があればさらに深い話し合いが出来ていくのです。

《地域での活動、国際社会での活動》

〔ふれあい通学合宿〕

「通学合宿」は、子どもたちが異年齢での共同生活や地域との交流をしながら通学することにより、子どもたちの生きる力を育むとともに、家庭や地域の教育力を高める。

1 事業主体：ふれあい通学合宿実行委員会

＊会長：大根小学校PTA会長

＊構成：大根中学校区の幼稚園、小・中学校、PTA、大根中学校区子どもを育む懇談会、下大槻団地長寿会、東海大学駅前商店街、東海大学ローバースカウト隊、教育委員会生涯学習課

2 実施期日：7月2日（水）～7月5日（土）の3泊4日

3 活動場所：大根公民館

4 参加者：小学生 49人、中学生ボランティア 13人

5 参加費：小学生 4,300円（3泊4日）、中学生 500円（1泊）～食費、寝具代等～

6 主な活動内容：調理・館内清掃等の日常生活体験、「もらい湯」協力家庭との交流
長寿会との交流活動、商店街での職場見学、レクリエーション活動など

＊平成15年度から実施

神奈川県連盟平塚第7団東海大学ローバースカウト隊で、ふれあい通学合宿に協力しています。

これはローバー独自の活動ではなく、地域の小学校PTAの人達が泊りがけで防災訓練をしていたときに、子供たちにも宿泊体験をさせたいと始まりました。

最初PTAの人達が中心になってお手伝いをしていたが、いざ本番になると皆さん仕事があるので四六時中子供たちの面倒を見ることが出来ないのので地元の大学生にお願いしたいということになった。

そこで、3年目からローバースカウトに手伝ってもらったのですが、最初PTAの人達からはあまり期待されていませんでした。東海大学のローバーは、隊として活動をしているので主将、トップ以下指示系統が明確で部門毎に展開できるので段々期待されるようになってきて、今年10回目にして東海大学のローバースカウト隊は外せないという形にまでなってきました。

この「ふれあい通学合宿」は、2つの小学校の子供達50人が公民館に泊まって生活体験をして、小学校に月火水の3日間通う。

ローバースカウトの学生達は夜、子供たちと一緒に泊まって、食事もそこでできますから万々歳。朝は子供たちを送ったら大学に行き授業を受ける。子供たちは3時半過ぎに公民館に戻ってくるので授業のない学生が公民館で準備をして待っている。夜は体験活動の指導ができる。

活動での役割が認められるまでには5、6年かかりましたが、今は非常に重要視され毎年、教育委員会から表彰を受けています。

この表彰も最初は4年生が受けていましたが、「4年の7月に表彰をもらっても就職には間に合わないから3年生にしよう」ということで3年生が表彰されることになり、それを就活のための履歴にきちんと書けるわけです。教育委員会もりっぱな賞状を作ってくれて就職面接の時に見せると、採用の時に有利に働いています。

地域の教育委員会にそこまで信頼されるようになりました。それが一つ、ローバー・ベンチャーとしての活動として重要なポイントなのです。

フォーラムで提案して活動していることが、自分達だけで満足するのではなく、地域の人に理解され「君たちのやっていることはすごいね、今度こっちも手伝ってよ」と言われて、初めて社会貢献の意味合いがあるのです。

地域の人に評価されるということは、地域の人が納得してくれるような活動をするということです。この「ふれあい通学合宿」は、10年も続いているのでマンネリ化し始めており、ローバー諸君も改善のための創意工夫に苦勞しているのが現状です。

自分達ですべてやるなら、自分達の思ったことをやるので楽にできますが、実行委員会で進めるため、幼稚園園長、小中学校校長、PTA会長、自治会会長、老人会・長寿会会長、商店街会長などと共に、ローバースカウトの代表が対応して意見を出していますが、最近では自信を持ちすぎて意見を言いすぎるのでちょっと僕としては心配なところもあります。

例えば、ローバースカウトの学生たちが、公民館ですからあまり広くないし庭があるわけじゃないのにキャンプファイヤーをやりましょうって提案してしまっただけで、結局、ホールがあるので室内でキャンドルサービスをすることになりましたが、真剣になりすぎたためにボーイスカウトらしすぎるキャンプファイヤーをやり一般の子供たちがなかなか乗れない状況になってしまった。

ボーイスカウトの経験、体験を生かしながらも、一般の人との感覚の違いを互いに理解しなければならないことも学びました。

参加費4,300円、中学生500円となっていますが、この中学生というのは、小学校の時に経験したメンバーですから、特に指示を与えなくても自ら行動しますが、その中学生を大学生のローバースカウトがどのように事前に訓練をしてももう少し意味のあるプログラムを考えなければならないのかが、課題です。

これは、ボーイスカウトの班制教育で、班長・次長の役割をどう意義付けするのかを考える事と同じです。

この活動で一番楽しいのは、「もらい湯」で、地域の普通の家をお願いして2、3人ずつ一般の家のお風呂に入りに行く。参加者の子供たちは団地住まいも多く、地域の農家のお風呂から帰って来た小学校4年生の子が「先生すごい風呂広かった」「溺れそうだった」などと言う。その話を聞いた農家の人たちが次の年に、打たせ湯をするため外にお風呂作ったり、最初はおやつをあげるだけだったのが、合間に木工細工をするお宅も出てきたりして非常に和やかに行われてもいます。

その時もローバースカウトがグループに一人ずつついて最後まで付き合う。

食事子ども達が準備をするのですが、なかなか難しいのでボランティアで参加しているお母さん達が手伝ってくれます。

食事のメニューは粗食過ぎるのもっと内容のある食事にしてほしい、網戸が少ない、エアコンの効きが悪い、布団が薄すぎるとか、家はベッドですがベッドはないのですか、など最近では思いもよらない課題もで

ております。

皆さんも地域と連動した活動を考えてみてほしいと思います。

＝開発教育＝

〔C J Kプロジェクト〕

中国・台湾〔C〕、日本〔J〕、韓国〔K〕の3か国共同のプロジェクトで、各国連盟のローバースカウトが、バングラデシュの首都ダッカから車で4時間以上離れたジャマルプールで、平成26年2月14日から20日にかけて、地元住民に保健衛生、環境保全、母子栄養摂取にかかわる啓発活動を展開、また、各連盟のローバースカウトとの国際交流と国際理解にかかわるプロジェクトを実施。

それからもう一つはご承知のC J Kプロジェクトです。これは国際貢献事業でボーイスカウトとして当然みんな興味を持っていることですが、この他、国際スカウトセンターなど国際活動にぜひ参加してほしい。

実はこの2つを並べたのは、一つは「地域・身の回り」のことに、「非常にグローバルな国際的」なことの二つです。

テーマ、物の見方、考え方に2つの見方がありますということを知ってほしいのです。

グローバル化的な活動に参加して自分の身の回りのことを考えていくというプログラムにしているのか、国際貢献の活動をして帰国したベンチャーやローバースカウトがその後どのような活動を継続するのか、海外で経験・学んだことをどう活用するのか、あるいは地域活動をして地域で評価されたならば、それをもっと広げていくにはどうするかということを考えることが必要です。

すなわち、身の周りの課題を解決することによって広くグローバルな問題まで考えることができるようになることであり、逆に、海外派遣などでは、国際問題を理解・体験することから、地域や身の回りの問題解決にも気づくことができるということです。

このように、個別の課題を幅広く扱うことが出来、より一層高度なレベルでの判断ができるようになることです。

この考え方・手法を「開発教育」といいます、皆さんのフォーラムでもこのような方向になることを期待しています。

＝興味・関心の広がり自己決定＝

自分の身の回りのことをやって「やった、やった」じゃなくて、それをどう広げていくか。札幌にいた時に、ある道東の小さな小学校で担任の先生と共に、総合的な学習を担当したことがあります。

紅茶の話で、紅茶なんて飲んだことないという子がいて紅茶を飲みたいという話になり、地元の公民館と

相談して、土曜日に公民館でそのクラスの子だけ集まって、にがいの、うまいのなどとワイワイ言って紅茶の試飲会をやりました。

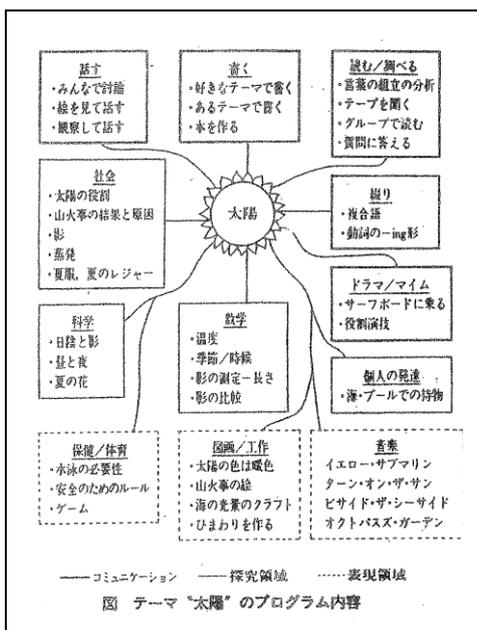
次の週の時間にまた紅茶が話題になっているような意見が出てきて、紅茶ってどこで作られるのだろう、日本だよ、そうじゃないインドだよ。インドで紅茶を飲むとき、どんな格好しているのだろう、インドの服装はどんなのだろうなどのテーマが出てきて、総合的な学習のきっかけになるのです。

教科書があれば単元や課題が決まっていますが、今週はこれ勉強するのですよ、という形と違うのです。

ボーイスカウトは、子ども達が何に興味を持っているのか。その興味からどう広げていくのかということなのです。

ニュージーランドでは、子供の想いから年間の学習テーマを決めたりします。

例えば、子供たちの夏の思い出から「太陽」がテーマで、太陽についてグループに分かれてそれぞれの書く練習とか、話す



練習とかの勉強していく。

途中で飽きた子は他のグループに入るのも自由。それがニュージーランドの小学校授業で、日本では考えられないことです。

総合的な学習の時間というのは、決まったことをやるのではなく、みんなで決めていく「自己決定」が重要なので、ボーイスカウトの教育法はまさにこのとおりなのです。

自己決定、みんなで決めていく、ブラウンシー島でキャンプをした時も子供たちがキャンプをして非常に苦労したわけですが、そこから広がっていくわけです。

ベーデン・パウエルがそこで「ああしなさい、こうしなさい」と指示した訳ではない。

日本の場合はどうしても学校教育というイメージがあるから、短時間に全てやってしまいたいというのがあります、キャンプに行っても二泊三日の中で覚えてもらいたいことが沢山あるから、プログラムをギュウギュウ詰めにしてしまうからただ疲れて帰ってくるだけ。

これらの考え方を修正していかなければなりません、そのためには若い人の力が必要なのです。

土曜日が休みになって本当に子供たちが土曜日をうまく活用できたかを振り返ると、大騒ぎした割にはうまくいかなかった。一番納得して動けたのは塾です。

普通、塾の場合は、一人一人の成績が良ければいいので他の者を蹴落とせと言っているが、最近の塾は勉強だけではなくて、野外体験活動もやっているのでボーイスカウトの出る幕が無くなる可能性もあります。

夏休みに長期合宿学習会をやり、午後は登山や滝登りなど過激な活動をして、グループでの仲間づくりも行い、仲間と共にどうやって成功させるかということを経験させている塾があり、ボーイスカウトが考えているようなテーマを行っておりボーイスカウトはどこで生きていけばいいのでしょうか。

《隊長とスカウトの静かな語り合い》



この絵は、B-Pの「隊長の手引き」の表紙に描かれている絵です。

ボーイスカウトの場合大切なものの一つは、隊長が火の側でスカウトに何か話しかける。スカウトがリラックスして聞いている。

このことが重要なのです。こういう学び方、学ばせ方がどこで出来るのでしょうか。

皆さんがビーバーやカブを対象とした時に、いつこういうチャンスがあるのでしょうか。静かに先輩の話を楽しげに聞いている子供の姿。僕はずっとボーイスカウトというのはこのようなものだという気がします。もう一つは生活上の遊び訓練だと思います。

どこの隊もそうだと思いますが、うちのローバーも遊びすぎて様々なエピソードが残っており、10年・15年で記念誌作り、先輩たちの文章を見ると3分の2の人たちが一度は辞めようと思ったサークルであると書いてありますがほとんど辞めてない。それがボーイスカウトなのです。

一つは遊び訓練。生活の遊びなのです。

僕が大学の付属幼稚園園長をしていた時に、子供たちとハイキングに行った時に先生達にもリュックを背負ってもらいましたら、最初は宅急便で送ってもいいのではないかと、バスがあるのになぜバスに乗せないのかなど先生達に怒られましたが、5年くらい経つとその理由が分かってきます。自分自身で納得する理由が出来て来るのです、それが必要なのです。

物事は、単体にあるのではなく全て繋がっているのです、その“つながる”ことが理解できるようなヒントを与えてあげるといことが大切なのです。

要するに、ボーイスカウトは螺旋形に成長していくプログラムですからそれを基本にすればいい。ベンチャー、ローバー、指導者としてどう“つながっていくか”ということを皆さんが考えなければいけない。

学校教育は教科中心で、国語・算数・理科などを一生懸命勉強しているだけであって、果たして人間形成につながっているのかという疑問があります。そこでホームルームの時間ができて、ホームルームで話し合いをすれば少し解決できることを期待したがあまり効果がない。

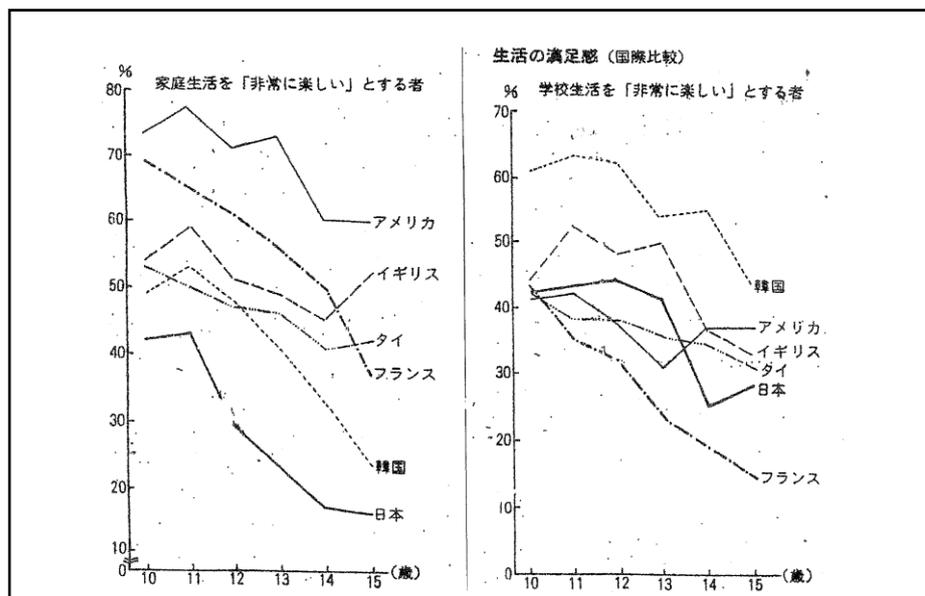
そこで、クラブ活動導入をしたが人間形成の訓練ができない、経験させられないということで総合的な学習の時間を持ってきたがこれもなかなか大変だということで、では学校は何をすればいいのかということなるのです。

僕らが子供の時は、楽しいのが学校であるし、楽しいのが家庭であると思ひ込めよと教えられたような傾向にあり、学校は楽しいと思ひ現実に楽しかった。

ある年にイギリス・アメリカ・フランス・日本・韓国・タイで10歳から15歳の子供たちに調査をしたら、日本は学校も家庭生活も楽しくないと言っている人が多いということが分かった。

それで驚いて、ゆとり教育が生まれ、みんなが楽しく、ゆったりと勉強できるように、家庭生活も楽しいと言われるようにといろいろなことを考えた。

教科書を薄くし、金曜日まで勉強して、土曜日を休みにしたが、土曜日がうまく使えなかった。本当はボーイスカウトがもっとうまく使うべきだったが、なかなかそれもうまくいかなかったということです。



《参加と参画》

これから皆は「参加と参画」の違いを理解して、意識して欲しいのです。

例えば、国際キャンプセンターでのことですが、諸外国の人達がキャンプに来て質問された時に、同じ年代のヨーロッパの若者は「ちょっと待ってください、上司に確認をします」と言って、いちいち確認をとってから答えるが、日本の青年スタッフは、自分で判断して回答していた。判断に間違いはなかったのですが、反省会の時にそれが話題になって、日本の青年のやり方は非常に立派だけれども、ちょっと違うのではないか、「あなたは確かに日本を代表してきているが、あなた大学生ですね、大学生としての立場での回答をしていないのではないか」と言われたのです。

高校生が18歳までに体験していることを基にして、どういう参加が出来るか。その時にそれを意識して参加することを、ある意味では参画といいます。

無意識に自分は高校生だけど、ここをやれと言われたからそこを全部決めるよ、という事とは違うのです。

委託された課題に答えるだけでは、ただの「参加」。その次、上司と相談してもう一度確実な答えを考えていけば「参画」なのです。

同時に、皆さんは最初に申し上げたように、ユニフォームを着ていない友達と、どういう関わり方をしているかです。将来的にもユニフォームを着ている人だけが友達でいると世間知らずになります。ボーイスカウトの常識、世間の非常識と言われることになるのです。やはり広い友達付き合いをするということ、視野を広くして物事を考えるということが当然必要なのです。

地域のことも、国際的なこともいろんなアンテナを張って、広く考えていく必要があるのです。学校教育は限られた中を一生懸命やればいいのですが、ボーイスカウトに関わっているならば、そのアンテナを広げていくということが重要なのです。

スカウト以外の友人との行動をする努力を是非していただきたい。

ユニフォームを着ていない時でも、皆さんの行動は「あいつはボーイスカウトをやっていたんだよ」と言われるような行動であってほしいと思います。

僕も東北出身であり、東北は歴史的に虐げられていたこととも関係があるのかわかりませんが、すぐ引いてしまう傾向があるので、それをいつも反省しております。北海道で生活している諸君も、豊かな自然の中でゆったりと生活してしまっているために、もう一步踏み出すことを躊躇している部分があるように思いますが、ぜひそこを思い切って飛び越えて北海道を盛り立ててほしい。

そして、何か疑問に思ったら、先輩や指導者の人に質問をしたり、意見を述べたりしていくということが、ボーイスカウトとしては大切なことなのです。

道産子として、とにかく今以上に元気に羽ばたいていく努力をしていただきたい。

今日伺って、皆さんの意欲的で自分達の意見をしっかりと持っていることに安心しました。さらに元気に羽ばたいて、ローバー活動と共に指導者への道に向かい、広い視野、広い体験をして大きな人間となることを期待いたします。

平成26年度

《北海道スカウトフォーラム／北海道ジュニアリーダーのつどい》

[日 時] 平26年9月27日(土) 13:30～9月28日(日) 14:00

[会 場] ボーイスカウト北海道連盟会館

[参加者] ベンチャースカウト: 7名(4地区)

若い風メンバー: 3名

成人指導者: 10名

.....

《北海道スカウトフォーラム》

[採 択 テ ー マ] 社会に飛び込め道産子ベンチャー

[アクションプラン]

◇社会との関わりを求め、単なる奉仕のみならずボランティアを考えた活動を行う

例: 継続的な独居老人宅除雪奉仕など地域社会のニーズに応えた活動

◇道産子ベンチャーとして意識・意欲の向上と自分達で結末を付ける活動

例: トライアルキャンプの継続実施

[全国フォーラム代表者] 旭川地区 上野 僚我 君

[アフターフォーラム]

平成26年度内に、北海道スカウトフォーラム、全国フォーラムの採択テーマの具体化を検討するアフターフォーラムを開催し、27年度の道産子ベンチャーの活動に繋げる

平成26年度
北海道カブラリー

参加者数	スカウト	129名
	指導者・保護者 (内本部スタッフ30名)	88名
	若い風メンバー	14名
	合計	231名



=テーマ= B-Pからの依頼書 (リクエスト)

～スカウトたちの感想文から～

- ◇ いかい式のとて、北海道にこんなたくさんのカブスカウトがいるのを知ってびっくりしました
- ◇ 夜、なんか変な棒をわたされて(光るやつ)、キャンプファイヤーやったのでおどろきました
- ◇ 2日目に行ったJRタワーで男子はトイレに走っていきました(笑)、景色は最高でした、広いまどから見る景色はキレイで神々しく輝いていました
- ◇ 夜の動物園は暗くて少しこわかったけど、キリンが座っていたり、カンガルーにさつまいもたべさせて、とてもうれしかったです
- ◇ 滝野の森から疲れてかえってきたときに、リーダーの人たちが作ってくれた焼きそばがうれしくて、すごくおいしかったです
- ◇ 閉会式の時、明日のちかいを言ったときはきんちょうしたけど、後から名し交かんした釧路のスカウトからきたハガキに「閉会式の言葉上手でした」と書いてあったのでうれしかった
- ◇ はじめての組長の仕事は大変だなあ～でも、やってよかったヨ
- ◇ 机のすぐ見える所にかざってある写真立てとシカのツノのチーフリングにカブラリーのすべての思い出がつまっています

≪ 目的 ≫

北海道のカブスカウトが一同に集い「組活動」を中心にスカウトの自主性を育み交流を深める“学び”“遊び”“思い出が残る”機会をスカウトに提供し、何年たっても忘れられない3日間とする企画・運営は、従来の固定概念にとらわれない柔軟な発想で、「若い風プロジェクト」と連携して推進

≪ 会場 ≫ 札幌市青少年山の家〔宿泊所〕 / 滝野すずらん丘陵公園、札幌市内各施設、札幌円山動物園

≪ 日程 ≫

日	第1日目：9月13日(土)	第2日目：9月14日(日)	第3日目：9月15日(月)
午前		朝礼	朝礼 ミッション4：滝野の森で
午後	オープニング ミッション1：秘密基地	ミッション2：札幌市内	サプライズ昼食 クロージング
夜間	炎と森のカーニバル	ミッション3：円山動物園	

《運 営》

1 「子どもたちにプラスになること」が判断の基本

組織状況等を踏まえて、従来の固定概念にとらわれない柔軟な発想で効率的に行い、子どもたちにど
うプラスになるかを判断の基本とし、子どもたちに「ゆめ」を与える。

2 全ての指導者がスタッフ

全ての参加指導者はカブラリー運営スタッフとして役務を分担する。

「若い風プロジェクトメンバー」が主担当する部署は、トレーナー等がサポートする。

3 カブスカウト探偵隊の編成と生活・活動の単位

(1) 参加隊を基本に混成で「カブスカウト探偵隊」を編成して活動する。

(2) 「カブスカウト探偵隊」は、「組」の単位で生活・プログラム展開を行い、日常的に少人数隊では
難しい「組活動」をスカウトたちが体験する場を作る。

4 スカウトの健康・安全管理

(1) 安全管理・健康管理は隊長・参加隊引率責任者の責務。

保護者と連携を密にしてスカウトの健康状態把握と食物アレルギーへの個別対応。

(2) スカウトへの面会は原則禁止、飲食物の差し入れは一切お断り。

(3) スカウトの個別情報の公開規制と「チャイルドプロテクション」を順守、肖像権の扱いに配慮。

(4) 2日目の札幌市内探索では、スカウトの安全と一般市民への配慮のもと所属団の隔たり無くスカ
ウトを見守り指導する。

(5) 参加する保護者には、リーダー補助としての意識で参加することを要請する。

5 生活規範と各種規制を順守

カブラリーでの活動を通じて、スカウトたちが社会的マナーを守り生活規範を発揮できるように指
導する。指導者は、施設等での諸規程等を順守し、喫煙や日常行動は常識を持って対応する。

6 記録・広報

(1) 「カブラリー専用の掲示板」を開設して、北海道連盟ホームページからリンクする。

掲示板には、カブラリー参加指導者、保護者が自ら撮影した写真にコメントを付けて投稿する。

(2) 引率指導者・保護者が撮影した写真の提供を求める。

スカウトたちの生き生きとした様子を多く紹介するため、引率指導者・保護者が撮影した写真の提供
を求め、掲示板への発信や記録CD-ROMの作成を行う。

《プログラムの流れ》

【カブラリー物語】

日本から遠い国～イギリス～から、バーデン・パウエルおじいさん《B-P》が、北海道のカブスカウト
たちに“秘密の宝物”をプレゼントするために来てくれました。

でも、《B-P》は、皆が集まっている「滝野の森～青少年山の家～」に来る途中、札幌市内のどこかに
“秘密の宝物”が入っている『宝箱のカギ』を忘れてきてしまいました。

困った《B-P》から、「執事～トーマス～」を通じて北海道のカブスカウトたちに『宝箱のカギ』を探
し出して欲しいと依頼書（リクエスト）が出されました。

北海道のカブスカウトたちは「カブスカウト探偵団」を立ち上げ、《B-P》からの依頼書（リクエスト）
に書かれているミッションにもとづいて、《B-P》に教えられた“ワザ”を使い『宝箱のカギ』を探しま
す。みんなの力を出し合い、協力しあって『宝箱のカギ』を探して、滝野の森で休んでいる《B-P》お
じいさんに届けましょう。

カギで開けた箱からどんな宝物がでてくるかな？

【ポイント】

◇ 4つのミッションに対して『カギ』を設定して

- * 「ミッションをクリアするごと」に
- * 「カギに近づくようなヒント」を与えて
- * 「最後に全部のヒントを合わせる」と「カギの在りかが見つかり」
- * 「秘密の宝物をゲット」することができる！！

【展 開】

- 1 「宝箱」を見せる
オープニングでスカウトたちに「宝箱」を見せ、中に入っている「宝物」に興味を持たせます。
- 2 「B-Pの執事」が課題提示・確認
各ミッションでは「B-Pの執事」が出てきて、課題提示、課題の確認を行います。
- 3 「カギ」が集まる
ミッション毎に、課題をクリアして“組・隊”で「カギ」をさがします。
この「カギ」で「力を合わせて(協力)」して、「宝箱」の「カギ」を開けます。
- 4 「B-P」から「宝物」がプレゼントされる
「カギ」が開くと、宝箱から宝物(参加記念品)が出てきて、B-Pからスカウトにプレゼントされます。

【ミッションのプログラム】

No	テーマ	キーワード	会場
1	秘密基地で「1のカギ」を探せ	“仲間づくり”	滝野公園「子どもの谷」
2	札幌市内で「2のカギ」を探せ	“探求と協力”	札幌市内の施設等
3	円山動物園で「3のカギ」を探せ	“未知の世界と愛”	円山動物園
4	滝野の森で「4のカギ」を探せ	“挑戦と自信”	滝野公園「滝野の森」

【〔ミッション2〕札幌市内で宝物を探せ コース】

コース	午前	午後	札幌地区ホスト団	参加団
1	JRタワー展望台	下水道科学館	札幌第1団	千歳第1団・室蘭第1団・帯広第7団
2	大倉山展望台	市民防災センター	札幌第9・12・27団	室蘭第4団・帯広第6団
3	北大植物園	北欧パン博物館	札幌第10団	函館第3団・北見第2団
4	北大総合博物館	青少年科学館	札幌第10団	函館第2団・旭川第6団・旭川第12団
5	白い恋人パーク	北大総合博物館	札幌第22団	江別第2団・釧路第11団
6	市民防災センター	サンピアザ水族館	札幌第24団	滝川第1団・苫小牧第2団・富良野第1団
7	札幌ファクトリー	大倉山展望台	札幌第26団	帯広第4団



「企画会議」
「室内営火のリハーサル」
「記念品のシール貼り」
「昼食の焼きそば作り」
等々、子どもたちの笑顔を期待して、準備に励む本部スタッフの面々

指導者の方々の感想文から
＝北海道カブラリーの評価・反省＝
～地区集会等の参考・ヒントに～

【成長し楽しんだスカウトたち】

《組長として》

- ☆ 編成隊で組長に指名され、最初は嫌がっていたが、大変良く皆をまとめていた。団に戻っても今回の経験を生かして力を発揮してくれると思う。
- ☆ 組活動ができない現在、このような編成隊を組み込んでいただき、他のスカウトと協力して一つのことを成し遂げるということを経験できる機会を提供していただきことに感謝したいと思います。
- ☆ 毎夜開かれた組長会議で打合せされた内容が、各隊に帰った後にそれぞれの隊員に組長から正確に報告されていた状況を確認出来、この組長会議について自隊でも実行しようと感じました。

《組活動の効果》

- ☆ なによりも、参加したスカウトとデンリーダーが、ボーイスカウトへの理解を深めたことです。
団では、組長・次長を中心とした組活動が少数故にあまり出来ていませんでしたが、今回はその形態が体験でき、最初戸惑っていたデンリーダーや年長スカウトが時間を追うごとに、任務を遂行し、年少スカウトも全体の指示にしたがう努力が見える姿が大変頼もしかったですし、このまま原隊でも活動できるように環境整備を痛感しました。
- ☆ 隊活動中に各組のデンリーダーが活躍しており、スカウト達は活気に溢れてとても良い状態と思い、自隊でもデンリーダーを取り入れようと考えています。
- ☆ 隊の中で施設間を行き来し、施設内では組単位での行動という点はカブラしくて良かった。組ごとだと一人一人が役割を持つ事ができた。
- ☆ 宝箱のカギを求めて我先に東奔西走するスカウト、その中でも互いに協力し合い乍ら助け合う心を学んだ様に思います。
- ☆ 他地区のスカウトと混合組になることで、自隊内での動きと違う所が見えたとし違う動きをしていて良い経験となった。

《交流、そして自信・笑顔》

- ☆ 今回のカブラリーを通して、スカウトの積極的行動を期待している所です。
- ☆ この度のラリー経験で自団から参加したスカウトは、大きな成長が見られると思います。
- ☆ それぞれのミッションを楽しみながら取り組んでいて、とてもよかったと思います。
- ☆ スカウト達は初めての体験なので、滝野の青少年の家に着いた時、寝るのが不安なようでしたが、編成隊で同室の他の団のスカウト達とも仲良く活動ができ同じ制服を着ている仲間、友達になりやすい協調性がありました。
- ☆ いざ出発とスカウトハウスに集合した面々・・・
曇っている・・・泣いている・・・不安いっぱいなのだろう。

見送りのお母さん達の表情も硬い。カラ元気を出して「いってきます」と大きな声で挨拶してみただけでもやっぱり不安が大きい。

⇒そしてカブラリーが終わり

迎えにきてくれたおうちの方に、ちょっとどや顔しているスカウトが、かわいかった！！

何より子どもたちの充実した楽しそうな笑顔！！

- ☆ 札幌のいろいろな施設をまわることができて、子ども達には貴重な体験ができ、そして良い思い出に



【一寸不安な様子を見せる初日の受付】

なった。

普段出来ない、感動、恐怖、遊び体験が出来印象に残った様です。

☆ それぞれのミッションを楽しみながら取り組んでいて、とてもよかったです。

☆ 地方のスカウトにとって親から離れて札幌に行くというだけで嬉しいことです。加えて、普段の隊集會では経験できないプログラムの展開にはさぞかし大興奮でした。

【スカウトから学んだ指導者たち】

《スカウトに導かれて》

- ∞ 2日目の札幌探索、スカウト達は目を輝かせながらカギを探しておりました。長距離徒歩移動にもかかわらず、本当にスカウト達は弱音をはかず、みんな良く頑張りました。そんな姿に引かれ、よれよれになりながらも同行できたのはスカウト達のお陰ですね。
- ∞ スカウトたちの活動中の生き生きとした姿を見ていると、もっとこの隊で活動したいなあと思いました。スカウトの皆さん、素晴らしい時間をありがとう
- ∞ 子供達の表情はいつも正直で、楽しい時は笑顔、歩くのに疲れた時は辛い顔、真剣な顔などたくさんの素直な心の中の表情をそのまま見る事ができました。
- ∞ スカウトたちのすてきな笑顔で溢れた三日間になったと思います。がんばってよかったなあーとその笑顔を見て心から思いました。
- ∞ セレモニーで役にあったどの子も、目がキラキラしていて「楽しい！！」と言ってくれたのがうれしかったです。みんな、ありがとう！！
- ∞ 初めて会った仲間達と迷いながらも、ミッションをクリアする度、息が合い、笑顔が増えていくことに、安堵し喜びを感じた。
- ∞ 可愛いスカウト達と、様々なミッションを通して触れ合えたこの3日間は、この活動をして居ないと出来ない、かけがえの無い経験をさせていただいたとラリーが終わった今、しみじみと感じて居ります。この編成隊との出会いに感謝です。
- ∞ 今では素敵な思い出がたくさん残っています。編成隊のスカウトたちは素直で優しい子が多く、とても良い仲間になれたと思います。

《他の団との交流を通じて学ぶ》

- ∞ 他の地方の方と混合の編成隊活動は、普段地区内でも少ない人数なので、スカウト達にはとても良い経験でした。編成隊のスカウト達とリーダーとの交流活動が、とても新鮮に思われました。
- ∞ カブラリーの三日間では自分達の団だけではなく他の団の方々と活動が多かったので今まで気が付かなかった事、知らなかった事など、色々な事に気が付くことができ、とても貴重な体験をさせて戴く事が出来ました。本当にありがとうございました。
- ∞ 他の隊のリーダー達との触れあいもとても楽しかったですが、やはり普段は一緒に活動できない全道のカブ隊を交えての活動は単純にとってもおもしろかったです。
今では素敵な思い出がたくさん残っています。編成隊のスカウトたちは素直で優しい子が多く、とても良い仲間になれたと思います。
- ∞ 初めてお話しする指導者の方々に、いろんな無茶な依頼をしても、期待以上の動きをして下さり、さすがに志を一つにする皆さん・・・と感じました。



【みんなで大きな輪をつくろう】

結局最も大切なことは、指導者、スカウト、保護者相互の信頼関係なのだと思います。十分肝に銘じて今後の活動に活かして行きたいと思います。

すべてはスカウトの笑顔のために・・・。

- ∞ 初めて会う人々と3日間、心をつ一つにして過ごす事に不安を感じて居りましたが、実際始まってみると、不安を感じている余裕も無かったのかも知れませんが、隊長を始め大人の方々に恵まれました。
- ∞ 色々な団の方々と交流する中で、ボーイスカウトとは？指導者とは？多少なりとも勉強になりました。

《自ら気づき・学んだカブラリー》

- ∞ 正直、私自身の大会準備は直前対応で不十分でしたが、編成隊の皆様のご協力により何とかついていきました、いつもスカウトに言う「備えよ常に」はそのまま自分への言葉と反省しきりです。
組織減少下の制約の多い中での大会でしたが、素晴らしいプログラムを企画し行動に対し指示待ち姿勢が無く積極的に皆さんが動いている姿勢はさすがと思いました。
- ∞ 私たちは札幌まで制服を着て特急に乗って、大通公園のオータムフェアで昼食をとって会場に入りました、市民のボーイスカウトへの見方が久々な様に感じられたので、あらためて目に見える活動が必要かもと感じました。
- ∞ とても貴重でプラスになる経験ができました。まだまだなところや反省すべきところも多かったと思います。自ら足りない部分を自覚できたのが、体験のすごさだと実感しました。
- ∞ 体力的にはその後、数日間は疲れがとれず、脳の中も休まらない感じでしたが、本当に良い体験が出来たと思います。
- ∞ 今、〇十年ぶりに、作文用紙という物に向かい合い、「作文」作業に苦戦中。機械での入力に慣れてしまい、新鮮ですが、難しかったです。
- ∞ クロージングセレモニーで、リーダーもスカウトも肩を組み歌をうたった姿は心にいつまでの残り忘れられない思い出です。ご一緒させていただいた編成隊の皆様とまたいつか何処かで成長した姿でお会いできると嬉しいです。
- ∞ 全体の流れをしっかりと把握していないため、指示を聞いて動いていましたが、いざ自分だけで動いた時に、内容が分からず焦ることがあり、不安になることがあり臨機応変に対応できませんでした。
- ∞ いろいろなプログラムを見させていただき、とても貴重なことを勉強させていただきました。子供が多いと、とても充実した活動になりました。
- ∞ 全体の流れは、一日の終わりの会議で質問をしなかったことが問題だと思っています。分からなかったら聞けばよかったのに、大丈夫だろうという憶測で判断していたことは間違いでした。分からない時は質問します。
この経験を生かして、今後もスカウトの成長を見守りながら、自分自身も楽しんで活動して行きたいと思います。
- ∞ カブラリーは、4年に1度全道からカブ隊が集結すると聞いて、まるでオリンピックのようで、この機会を逃したらカブラリーを体験できないとおもい、参加してみたいとおもいました。

【改善を求めて～団・地区活動での参考に】

《運営》

※ 移動／連絡

- ♪ 前日までの悪天候による道路の通行止めなどがある場合、移動について参加隊で確認すれば良いことであるが、遠方より来る隊もあるので今回のような道路情報や緊急連絡の為に各隊参加隊との連絡網を作成して情報を流せば各隊も最善の方法で動けるものと思います。
大会開催の可否について道連からの指示があってもよかった。
(今回のブログ画面で大会開催がわかった。PCを使いこなせていないリーダーなどいたのでは?)
例：実行委員会担当者 ⇒ 各地区担当者 ⇒
各団参加引率責任者A ⇒
各団参加引率責任者B
- ♪ プログラム担当、セレモニー担当などで各部署間の情報共有がよくないと思った。
⇒LINEやインカムなどを使って情報共有できるとスムーズにいったのでは?
- ♪ 変更した点や連絡事項を、だれもが見える掲示板などに貼りだすと良かったかも。
- ♪ 隊長ハンドブック（運営マニュアル）の最終版が



〔地下鉄の中は行儀よく〕

地方の指導者に渡っておらず、意志疎通を欠いた場面があった。

♪ スカウト向けの時間日程表（貼りだす、手帳に記載）があった方がよかった。

※ 宿舎、部屋割、隊・組編成

♪ 部屋割が編成隊ごとで、話をまとめやすく、編成隊のリーダー間の打合せなどもしやすかった。

♪ 編成隊を作った時に、隊の中で組のスカウトの入れ替えがあったが、事前に原隊との引率責任者間での話し合いなどがあればよかったのではないかと・・・

♪ 残念だったのは、当団スカウト4人での参加でしたが1名が別の班に振り分けられて一緒に行動が出来なかった事（隊長として目を掛けてあげられなかった事）。

※ 心構え

♪ 編成隊指導者として、プログラムを十分に理解できていなかったため、隊長ハンドブックをしっかりと読んだつもりでも、実際の場面になるとよくわからなくなってしまい、スカウトたちにも不自由をかけてしまったのではないかと思います。

♪ 大きな大会を運営することの難しさに直面し、自分の考えの甘さや行動力の乏しさ、まだまだ実力が身についていないことを痛感する日々でした。過去の楽しかった大会を振り返って、諸先輩方の努力と偉大さを楽しみじみと実感したりもしておりました。

♪ 企画チームメンバーのチームワークにより、少しずつ形づくられていく過程は楽しく、エキサイティングなものでした。

♪ 編成隊の指導者の皆さんも朗らかな方ばかりで、とても穏やかな3日間を過ごすことができました。特にこういった大会になると時間に追われ、イライラしてしまいがちになるものですが、編成隊の指導者の方々はスカウトへの指導する際も、落ち着いて丁寧に話されているのが印象的で、本当に素敵な隊でした。

♪ 滝野公園はとても広い所で、多くのいろいろなプログラムが出来ると思いましたが、広いので子供の安全には十分に気をつけないといけないと思いました。

《プログラム展開》

※ 全体

◎ ゆとりの無い時間設定であった

♪ 大会の時間設定がキツキツではないでしょうか？

♪ ミッション間で5～10分程度のゆとりの時間（時間がオーバーした時にも使うことのできる）があれば良いと思います。物語のストーリーに追われている感じがしました。

♪ プログラムの数は少なくてもいいので、一つ一つのプログラムにゆとりをもって取り組めたら良いと思います。その方が準備に関わる方達の負担も少ないでしょうから。

♪ プログラムが時間いっぱい、交流できる時間が少なかった。（時間にゆとりあるプログラムを）

♪ 名刺、ハガキ交換の時間がとれず、残念だった。全体のスケジュールに組み込んでほしかった。

* 名刺・はがきの交換をどのタイミングでやったらよいかわからなかった。

♪ 交流の時間を設けてはどうか？

* 一緒になった仲間と時間を取って遊ぶ時間があれば良いと思いました。

2日目の夜に慌てて副長・デンリーダーたちに指示をだし、はがき・名刺交換をさせました。

その中で子どもたち自身も仲良くなり遊びを楽しんでいました。

* 部屋での交流の時間が少なかったことと、交流の様子を見られなかったのが、残念です。夜、皆疲れ切つてすぐ眠ってしまっていたので・・・

* 互いのスカウトの交流を含め友達作りも目的にあったと思うが、今回のスケジュールを見ると、部屋のスカウト交流は出来たようだが、隣の部屋のスカウトの交流は出来なかった様子。もっと余裕のあるスケジュール設定であれば良かったと思う。



〔新しい仲間と一緒に〕

◎ テーマ・ストーリー性

- ♪ プログラムに必要なストーリー性を演出し続けられず、B-Pからの贈り物については理解できたが、その物語をキャンプファイヤーや生活等につなげて、スカウトの気持ちを盛り上げてあげられなかったなあと感じています。
- ♪ 全体については、ストーリー仕立てでそれに沿ってのミッションはオープニングでの執事トーマスの説明もあり、スカウトも入りやすかったと思います。
- ♪ カブスカウト探偵隊で新しい仲間とミッションに挑戦して目標のカギ探し、カギを探すおもしろさ、自分で見つける楽しさカブスカウト活動の特別集会の流れが現隊では体験できない素晴らしいカブスカウト探偵隊のプログラムでした。
- ♪ プログラムの内容・ストーリーについては、純粹に楽しめました。
ミッションにストーリー性があり、3日間を通してやり遂げる楽しさがあつた。

◎ その他、全般

- ♪ セレモニーの大切さを実際のセレモニーの中でスカウトたちに感じさせてあげられなかった。規律正しさがあると、逆に楽しい時間をより強く感じられるものだよと教えてあげたかったです。
- ♪ ソングなどカブスカウトの歌集にないもので書かれているのでカブオンリーの指導者には歌集を調達するのに時間がかかった。そのため、独自でソング集を作成してスカウトに持たせた。
- ♪ 全道のみんなが集まったからできたこと、たくさんありました。カブコールもあんなに大きな輪でやったのは初めてでした。
- ♪ 今回スカウトの夢をそれぞれに書いてもらう企画を立てましたが急なお願いにも関わらず快く企画に参加、協力してくださりありがとうございました。
- ♪ 事前に頂いたプリントを見ると本当に沢山のプログラムが組まれていて、カブラリーを企画されたリーダーの熱意が素晴らしいと思いました。
- ♪ 組・隊のどちらで動かしているかわからなかった。
- ♪ ボーイ的感覚とカブ的感覚のリーダーの違いがあつた。
- ♪ 一つのミッションに3人必要
プログラム係、演出係、道具などの準備係をそれぞれ分けて考え、カブラリー全体もそれぞれの係が集まり打合せを重ねる。このようにすれば細かいところも早い内に気がついたと思います。
- ♪ とにかく時間がなかった。結構見切り発車したと思います。準備に時間がなかった
- ♪ 編成隊の隊長として隊を運営していく難しさを感じました（意見のくいちがいなど）
就寝後他団のスカウトの特性がわからない中でスカウトの面倒を一人でみなければならず、なにかあつたら他団のリーダーはどう責任をとっていただけるのかと思いました。
- ♪ 夜の組長会議も時間が遅く気の毒であつた。
- ♪ 名刺交換でぐっと距離が縮まったように感じました。
- ♪ 初めての運営本部員として参加したカブラリーは、新しい発見と驚きに満ちたものでした。
当初は、全道のスカウト達を、どう喜ばせようか、困らせようか、笑わせようか・・・たくさんの案でワクワクしていましたが、会議を重ねていくうちに、路線変更を余儀なくされ、ワクワクはハラハラへと変わってゆきました。
- ♪ 今回のカブラリーは大変良く計画されていて、大成功と思います。

※ 第1日目：オープニング、秘密基地（子どもの谷）、紙飛行機、室内営火

◎ オープニング

- ♪ 開会式からミッション1への導入は良かったが、隊・組間の紹介などがなくそのままミッションへ入った。（隊のアイスブレイクなどの時間があればよかつたと・・・）
- ♪ 全道からスカウトやリーダーが野外ステージに一堂に集まったオープニングセレモニーは壮観でし



【ノリノリで営火を楽しむ！】

た。これから始まる期待と緊張感が伝わり、ワクワクしながらスタートとなりました。

◎ 秘密基地・子どもの谷：ミッション1

- ♪ ミッション1で一つ目カギを探しに、指示書の解読に時間がかかる、持ち寄って話し合いが出来ない。解読した進む方向が分からない「こどもの谷」に行くのに看板の地図を見て進む。スカウトにもう少し分かりやすい地図があれば時間短縮ができた。
- ♪ 最後のポイントでは、17時の閉門時間にぶつかり慌てて繰り上げた、こどもの谷には楽しい遊具がいっぱいあり、もう少し遊具で体験させる時間が欲しかった。
- ♪ 子どもの谷では各ポイントを周りながらのクイズラリーで楽しませて頂きました。少し残念な事は、それぞれの遊具を使って、もう少し楽しめる時間があっても良かったのかな、と思った事でした。
- ♪ 一つ目のミッションでは、遊ぶ時間をほとんどとってあげられなかったのが残念でした。
- ♪ その広い場所(子どもの谷)での体力との戦いでした。子供達はミッションを探すのに奮闘し一生懸命に探していました。

◎ 紙飛行機

- ♪ 10メートル以上飛ばすスカウトもいてびっくりしました。
- ♪ 紙飛行機の規程(無重力)をもう少し詳しく教えていただきましたかった(牛乳パック・割り箸などがOKならば)。
- ♪ 紙飛行機を持参するのは遠方からは大変だった(着く頃にはくしゃくしゃ)。当日時間を取って作るのもありでは・・・
- ♪ 飛行機飛ばしの計測上位2名でよかったのでは、時間がおしてしまった(食事の時間に遅れるなど)
- ♪ 当団で参加スカウトの紙飛行機を合体して一気に飛ばしてアクロバット飛行するブルーインパルスのパフォーマンスを用意していましたが、発表する場面に恵まれず残念です。

◎ 室内営火

- ♪ ケミカルライトの使用やスタンツもわかりやすく、流れも良かったと思いますが音響では歌が聞こえなかったのが残念でした。
- ♪ キャンプファイヤーでのサイリウムを使った演出は闇夜に光る色とりどりのサイリウムがとても綺麗でした!
- ♪ キャンプファイヤー時に一体感があつた時もあったが、結構自由きままに遊んでいた感じがした。
⇒ ペンライトを渡す時に注意:ペンライトでは遊ばない(これが一番目立った)。
⇒ 静かに入る
⇒ 参加できるものを増やすなど
- ♪ 斬新で、若い風の可能性を感じた。スカウトはサイリウムをととても喜んでいて。スカウト達は、初めて会う仲間に最初はとまどいながらも、1日目の営火で盛り上がりすぐにうちとけていた。

※ 第2日目：札幌市内探索、円山動物園

◎ 全般

- ♪ 各編成隊に同行した「若い執事」(VS)は、内容を殆ど知らなかったもので事前の打合せが必要。
- ♪ 二日目のバス等の移動も大人数の大会の移動にしてはスムーズに進んだと思っています。
- ♪ 移動の時に、札幌のリーダーが付いて行ったが、もう少しスカウトに考える場を提供すべきと思う。(地下鉄ではどの方向に乗ればよいか。何線に乗るかなど)
- ♪ 札幌の団がホストになり、交流するというのは、いいアイデアだと思いました。
- ♪ ミッション2で1カ所に行って組毎にとったけどバラバラになってしまった。
- ♪ 歩くのも大変だった(ビーバーもいたし高齢者もいたし)が、つまずきもなくうまくいった。
- ♪ 電車を降りるときに時間がかかって運転手さんに注意を受けた。



〔食事は自分で盛付します〕

- ♪ 移動距離が長く、特に地方の人は先が見えず不安だと感じた。
- ♪ 札幌市内をミッション遂行のため、みんなで考え力を出しあって宝箱の「カギ」を探すため、たくさん歩きました。ヘトヘトになりながらみんな頑張ったとおもいます。
- ♪ 円山動物園～山の家への移動時間の見込みは前回のカブラリー同様無理がありました。

◎ 各コースで・・・

- ♪ 地下鉄を利用した札幌市内探索、防災センターで地震・避煙・消火の体験・暴風、自然災害のおそろしさを体験でき良かったです。
- ♪ 山の家⇒大倉山⇒防災センター⇒円山動物園と廻るコースで、ビーバー隊もいる中での長距離移動は、乗り物の時刻表に合わず、時間に追われスカウトも大変疲れた様子。風呂に入る時間もままならぬ状況、
- ♪ 公共交通機関を利用して回りました。私達はJRタワー展望室に行きました。ここでは札幌の町がすぐそこにあるように見えました。ここで子供達はクイズの答えを探していました。

◎ 円山動物園

- ♪ スカウト達が迷子にならないようにデンリーダーと副長を付けての組活動にする。
- ♪ もぐもぐタイムのオオカミは凄い人ばかりスカウト達は時間をずらしてやっと見ることが出来た。フクロウに触れる体験コーナーがあり感動、なかなか動物の鳴き声を聞くことが出来なかったが夜の動物園は、ミステリーでスリルがあり良い思い出に残る体験でした。
- ♪ 夜の動物園もとても興味深かったのですが、ゆっくり見学できませんでした。
- ♪ 円山動物園は場所すらわからないので地元の子供に案内をしてもらいました。夜の動物園は初めてなのでとてもミステリーに感じました。子供達もワクワクしながら動物を見ていました。
- ♪ 午前中の観光から夜の円山動物園まで、子ども達は本当に頑張って活動したと思います。
- ♪ 特に2日目は長く、動物園は別の日にしてほしい。

※ 第3日目：滝野の森、焼きそば、クロージング

◎ 滝野の森

- ♪ 滝野の森で探索、森の交流館からローラー滑り台での下りはスリルがあり、森見の塔に向かい、事前に原隊でロープ結びを練習した成果がでた。
- ♪ ヒント提示後、すぐにカギを見つけに行ければ良かった。(指示の前に行っていました)
- ♪ 滝野の森の中を課題に挑戦しながら組活動をしました。スカウト達は笑ったり、時にはぶつかりましたが、すぐに仲よくなり交流を深めてよく学び、よく遊び、充実した3日間を過ごしました。
- ♪ 三日目は滝野の森でカブスカウトらしいミッションでした。このミッションはなかなかうまく考えたなと思いました。

◎ 焼きそば

- ♪ くわのみ広場では、奉仕スタッフの昼食「焼きそば」は最高でした。
- ♪ 最終日のサプライズ昼食～焼きそば～は、「追い(老い)風」の皆さんの見事なチームワークと協力、豊富な経験と知識、培ってきた段取りと動きの良さは素晴らしく、急なお手伝いのお願いにも嫌な顔ひとつ見せずに快く引き受けて頂き有難うございました。

尚、今後山の家にて調理する場合、担当はマイ包丁持参、準備品にはスプレー式の台所用漂白剤を忘れずに加えて用意された方が、より衛生的かと思います。

◎ クロージング

- ♪ ベーデン・パウエル師、リアルで素敵でしたよ♡



【楽しい仲間と宿泊室で】

※ 若い風そして感謝

◎ 若い風

- ♪ 今回一番は「若い風」の活躍だったと思います。
- ♪ 若い風メンバーとも交流が深まって充実した三日間を過ごすことができました。
- ♪ 若い風の人たちが頑張っていた
- ♪ 若い人の力を借りて新しいプログラムに挑戦できたのが良かった（キャンプファイヤーなど）
- ♪ 若い風の発想や感性、行動力には学ぶべき所もあり、チラチラと盗んで行きたいと思いました。
- ♪ 若い風メンバーによる営火は新しいスタイルでスカウト達含め大いに盛り上がりました。

◎ 感謝・感動

- ♪ 4年後また若い風が吹く事を期待します。良き思い出をありがとうございました。
- ♪ 札幌地区のリーダーみなさん、スカウト達のご支援に感謝いたします。
札幌地区指導者の皆様には、仕事があり、家庭があり、隊がありという中をご尽力頂き有難うございました。
- ♪ 編成隊の他のリーダーの皆様にも初対面にもかかわらずやはり同じ志を持つ仲間として意気も合い良くして頂きました事と、計画運営のスタッフの皆様方々に深く感謝致します。有難うございました。
- ♪ 今回のカブラリーに参加して本当に良かったです。
- ♪ 指導者やサポート、協力してくれたリーダー方、若い風のみんな、そしてスカウトのみんなには本当に感謝の気持ちでいっぱいです。
- ♪ 皆で歌ったRPGは感動的でした！！
- ♪ 今回出会ったスカウトのみんなとまた会えるのを楽しみにしています。
- ♪ とてもいいカブラリーだったと思っています。ありがとうございました。
- ♪ 温かな声をかけて下さった本部の皆様、本当にありがとうございました。
- ♪ 今回一緒にたくさん歩いて食べて笑い合ったスカウトが、またさらに大きく成長し、若い風となり次代を担う力となることを、心から祈念いたします。
- ♪ 滝野山の家に着くと本部の皆様、私の隊長が笑顔いっぱいで迎えてくれた。この皆様がたくさん時間も労力もかけて準備して下さったラリーの意図するところを、しっかりとスカウトに伝え体験させられるのか、改めて緊張しました。
- ♪ 編成隊は、初日は大変でしたが、時間の経過と共にまともになり仲良くなり良かった
- ♪ 総じて、大変なことも多かったが、スカウト、指導者ともに、良い経験になりました。
- ♪ カブラリーの企画運営をしていただいた実行委員の皆様、リーダー、若い風プロジェクトの皆様、カブスカウトの笑顔のためにご尽力を賜りありがとうございました。感謝申し上げます。
- ♪ 皆さまのおもいが次世代のスカウトへ受け継がれ、子ども達に「ユメ」を与えてくれていると思いました。夢のような3日間ありがとうございました。
- ♪ 最後のこの活動に関わった方々お疲れ様とご苦勞様でした。とても充実した二泊三日でした。
- ♪ とても楽しい二泊三日を体験する事が出来スカウト達もとても喜んでいました。
- ♪ 滝野の風にのって楽しいカブラリーでした。皆様友情のはがきを待っています。



【イギリスから来たB-Pがスカウトにメッセージを！】



【帰りのJRは楽しかった夢を見て・・・ZZZZ】

23WSJ第2次参加募集締め切り平成27年2月末日

～スカウトへ生涯に残る思い出と体験を～

23WSJ日本派遣団の第2次参加申込は平成27年2月末日です。原則としてこの締切日以降の参加申込はできませんので、期日までに申し込んでください。

◇ スカウト（中学2年生・2級以上およびVS）

参加申込数に若干余裕があります。スカウトの生涯に残る思い出と貴重な体験が得られます。経費がややかさみますがお子さんへの教育費先行投資されるものとして参加されるよう保護者の方にご説明しましょう。

◇ 指導者、ISTの特例参加

第2次募集で、参加隊指導者の交替参加（前半・後半参加：参加費6万円）、ISTの部分参加（5種の日程：参加費4万円）が決められました。詳しい事は日本連盟のホームページをご覧ください。北海道連盟事務局にお問い合わせください。

23WSJ参加英国スカウトのホームステイ

23WSJに参加する英国スカウト40名を、平成27年7月23日（木）～25日（土）〈予定〉の2泊3日間、北海道のボーイスカウト登録家庭で受け入れますが、後程協力家庭公募のご案内をします。

「23WSJを成功させよう」協賛金へのご協力を

「23WSJを成功させよう」協賛金の北海道への協力依頼目標額と9月末日の達成状況は次の表のとおりで、全国的に下位の方に位置しています。個人向けは、1口を分割、共同参加でも可能です。ご協力の程を！！

種別	依頼口数	1口金額（円）	達成金額（円）	達成率
個人向け	30	50,000	450,000	30.0%
法人向け	42	100,000	520,000	12.4%

CS・BS教育規程改正 平成27年4月1日から施行

カブ部門およびボーイ部門のプログラム教育規程が改正され、平成27年4月1日から施行されます。ボーイ上進時期の「月の輪」履修、「月の輪章」の新設、カブ部門修得課目、ボーイ部門の初級細目の改正などを主にした教育規程が改正され、平成27年4月1日から施行されます。詳しいことは日本連盟のホームページをご覧ください。

＝編集後記＝

- ◇ 課題が多様化し変化のスピードが速い今日、意見の異なる者も含め関係者が話し合うことで組織全体の一体感を高め、共通の価値観を得ることにより、組織の文化を変え、未来に向けた変革を行う取組み「ホールシステム・アプローチ」を行うための「フューチャーサーチ」（未来志向の討論）が、様々な分野で活用されています。ご一考ください。
- ◇ 「ジュニアリーダーのつどい」「平成26年度カブラリー」特集の「斧の響き149号」をお届けします。次号は1月1日号「第56回全道研特集」「若い風オープンフォーラム特集」と「新春誌上賀詞交換」を予定しています。
- ◇ 「新春誌上賀詞交換」の原稿を募集しています。1口（横8cm×縦4.5cm）2,000円です。詳しいことは、各団・各地区あて文書および道連ホームページでご案内しています。ご協力ください。

斧の響き 149号（平成26年11月15日発行）

発行・印刷：日本ボーイスカウト北海道連盟／発行責任者：北海道連盟 理事長 長岡 正彦

〒062-0934 札幌市豊平区平岸4条14丁目3-40 北海道ボーイスカウト会館内

Tel 011-823-7121 / Fax 011-814-9377 E-Mail bs-douren@bz04.plala.or.jp

北海道連盟公式HP <http://www.bs-douren.org/>